

「現代の動物医療 にも必要なのは

薬よりも

光線である」



静岡県
〔動物病院〕 獣医師

望月 正昭 さん

人と共生する動物は、その一生のほとんどを屋内で飼育されているものも少なくありません。屋内飼育で繁殖された子犬は一度も太陽光を浴びせる機会もなく、ペットショップなどで販売され、新しいオーナーのもとで冷暖房完備の室内で生涯を過ごす動物もいます。そういった環境では骨粗鬆症などの栄養異常、免疫異常、内分泌異常、自律神経異常など、生体の恒常性の低下を起し多くの疾病の原因となり得るのです。

獣医療において理学療法は新しい専門分野の学問であり多くの獣医師が熱心に取り組んでいます。特に外科手術後の運動不耐性、炎症、疼痛などの退行性疾患に対して機能回復やその後の維持、増進に効果を上げ有効な治療法として認められています。

また、内科領域においては呼吸器系、循環器系、消化器系、泌尿器科系、内分泌系、アレルギー疾患系、血液疾患系に応用されています。皮膚領域では、感染症疾患、内分泌系皮膚疾患、免疫系皮膚疾患に有効であり、そのほか自律神経疾患、精神科系疾患における有効例も認められています。

当院における動物理学療法としてのアーク光線療法

【カルシウム代謝への作用】

カルシウム代謝異常による骨粗鬆症、事故による骨折修復手術後の骨の癒合に効果的でありました。通常の骨折治療を行ったときと比較すると、骨の癒合期間が短縮され、さらに癒合部位に過剰な化骨はほとんど認められませんでした。

【運動機能障害への作用】

外科手術後の運動機能障害、腰椎ヘルニア、股関節の形成異常、膝関節脱臼などの患部に集中して照射することによって毛細血管の血流量を増やし組織の再生を促進して回復力を高めます。特に赤外線カーボンは整形外科分野の疼痛疾病（捻挫・腰椎ヘルニアなど）において疼痛緩和や機能回復の効果が認められました。

【皮膚疾患への作用】

遺伝性素因による皮膚疾患、アトピー性皮膚炎、アレルギー性皮膚炎、自己免疫性皮膚症候群においては体質改善などの有効症例が認められています。特に「紫外線」は接触性、感染性皮膚疾患における鎮痒作用が認められ多用しています。



アーク光線療法には、「生命活動には十分な太陽光線が必要である」というシンプルなインフォームドコンセントによって、オーナー様から理解が得られやすい利点があります。また、そのことはオーナー様自身が太陽光線の不足を感じているということの裏付けともなります。今後、光線療法がこれからの動物理学療法の一部を占めることを期待しております。